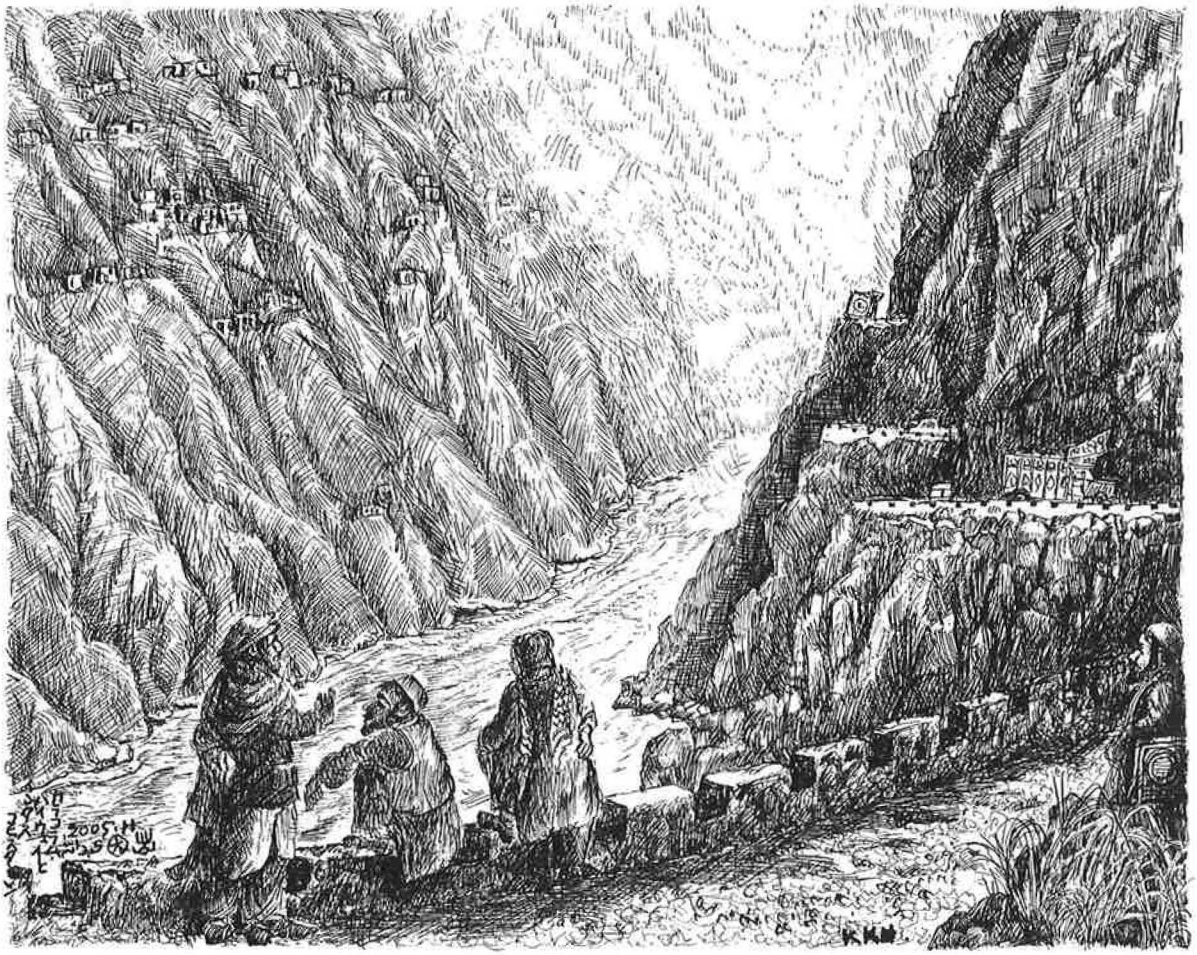
Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092（731）2372
FAX 092（731）2373

No.86
2005年12月7日

〈URL〉 http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp ＊アドレスが変わりました



表紙絵　カラコラム・ハイウェイとインダス・コヒスタン　甲斐大策

甦る緑の大地	中村　哲
パキスタン地震緊急支援報告・求められる長期的支援	村井光義
地震被災者寄付金の使途について	イクラムラ・カーン
飽くなき水路建設事業の現場で	本田潤一郎
特殊ルールでラマザンに挑戦	松永貴明
現地主義を旨にマネージメントで奔走	芹沢誠治
異文化に学びつつ、「改善」を模索中です	河本定子
取水口の改修完了、間一髪で決壊防ぐ	鬼木　稔
「主役は農家」をモットーに	進藤陽一郎
スタッフハウス食糧事情	杉山大二郎
たのもしきＰＭＳの現地スタッフたち（２）	藤田千代子

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

●用水路は九キロ地点、六百ヘクタールの灌漑達成

甦る緑の大地

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村哲

変わらぬ「アフガン問題」

みなさん、お元気でしょうか。

今年もいろんなことがありましたが、アフガニスタンは相変わらず、波乱含みです。

偶（たま）に日本に帰ると、「もう現地はおちついたんですか」と、よく訊かれます。私がびっくりして、「とんでもない。ますます悪くなっている」と答えると、相手も驚きます。「四年前までのタリバン政権時代のほうがマシだった」と言えば、もっと驚かれます。果ては「テロリストのシンパ」などと怪しまれても困るので、それ以上は話さなくなりました。世の話題は移ろいやすく、ニューヨークのテロ事件直後、あれほど官民上げて騒がれた大事なことも、まるで嘘のように水に流されてしまったようです。しかも、誤解や偏見を残したまま、漠然とした不安と危機感だけが残り、猛々しい防衛論や、平和憲法の改正論がもっともらしく横行するのを観るにつけ、寒々と致します。世の中には変えない方が良いものも沢山あり、やたらに改革すれば幸せになるとは思えません。

さて現地では、米軍や外国駐屯軍への襲撃は増える、難民の数が減らない、治安は悪い、旱魃（かんばつ）は続く、対日感情は悪くなる、人々の暮らしはちっとも良くならない。事実を述べれば余り明るいことは少ないです。おまけに、今年は大洪水と地震が加わり、踏んだりけったりです。四年前、タリバン政権が崩壊して「アフガン復興」が話題になったとき、「アフガン問題は忘れ去られるだろう。しかし、われわれの方針はこれまで変わらなかったし、今後も変わらないだろう」と述べました。事実、パキスタン在住のアフガン難民の数は当時二百万人、このうち百数十万人がその後一年で帰還したと伝えられたにもかかわらず、今年の報告では、「今なお三百万人がいる」（UNHCR＝国連難民高等弁務官事務所）と、不思議な数が報告されています。

「アフガン問題とは、政治や軍事問題でなく、パンと水の問題である」。アフガン空爆の折、私たちは声を大にして叫び続けてきましたが、遂に大きな問題としては知らされませんでした。旱魃は、明らかに年々悪化の兆しを見せています。国土の八割以上を占める農村地帯で、自給自足の村々が確実に消えてゆく。村

地元民による整地が進み、砂漠化していた600ヘクタールの農地が復活しつつある

に住めなくなった人々が職を求めて大都市にあふれ、さらにパキスタンに難民化する。この構図は少しも変わっていません。

実は「アフガン再建」はこれからなのです。しかし最早、議論に厭きました。この中で、「誠実に救援活動を継続するだけではダメだ」という意見も耳にします。確かに、現場にいて様々な現実を目の当たりにすれば、一種の焦燥感と悲憤に駆られます。おそらく、「テロリスト」たちも、この現実から無数に生まれてきます。偏見のない報道や、「貧困キャンペーン」など、正しく現実を伝えることも大切でしょう。でも、せめて手の届く範囲くらいは力を尽くして周りを明るくすることは出来ます。私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）は、無い知恵をふりしぼり、変わらずに活動を続けています。

六〇〇ヘクタールの灌漑を達成

今年の大きな出来事は、予定十四キロメートルの用水路のうち、九キロ地点までを仕上げ、五月までに六百ヘクタールの灌漑を達成したことでした。起工式以来二年、それも予定送水量、毎秒八～十トンのうち、約八分の一の量で出来たので、数千ヘクタールの灌漑は現実の目標となりました。地元民、現地職員、日本からの有志が一体となり、文字通り泥まみれ、汗まみれで行われ、目前で砂漠化した田畑がよみがえってゆくのは、誰にとっても大きな喜びでした。

一草一木もなかった所に、生命が躍動する。帰ってきた難民たちの家々が水路沿いに建ち並び、子供たちや家畜が仲良く水浴びをし、主婦が洗濯をします。鳥やトンボが舞い、アメンボが水面を歩く。小魚が群れて泳ぎ、水辺には自然の水草と、四、五メートル以上にも成長した柳並木が陽に映えて鮮やかです。

一同大いに励まされ、工事は急速に進展しました。植樹は水辺に柳の木約五万本以上、確実に根を下ろしています。冬に向けて、今年はさらに桑の木が数千本、乾燥した斜面にオリーブの木が予定されています。土地を肥やすためにレンゲの野草化も試みられます。

対照的に、米軍のヘリコプターや装甲車がけたたましく通過するのも日常になってしまいました。学校や道路建設などの「復興資金」をめぐって、醜いことがたくさん起きていることも見聞きしました。暴力とカネが虚構を以って世を圧する世界にあり、実のある自然の恩恵を以って対するのは、心ある者にとって一つの希望でもあります。

「ぼんやり眺めればただの荒野、涙をもって眺めれば流民の群、気力をもって見れば竹槍（田中正造）」ではありませんが、人災によって砂漠化した荒野の緑化を実現することによって日本の良心の気力を示し、事実を世に訴え続けたいと思っています。

みなさんの協力に感謝すると共に、事業の継続を願ってやみません。来年もどうぞよろしくお願いします。

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十三万人（二〇〇四年度）。

●パキスタン地震緊急支援報告
求められる長期的支援

PMS本院事務所　村井光義

現地スタッフ有志の強い希望

十月八日午前九時前(パキスタン時間)に起こった大地震の四日後、十二日午前九時に救援物資を届けるため、イクラムラ事務長以下スタッフ九名と事務長のご子息、総勢十名、車三台でマンセーラへ出発しました。

この計画はイクラムラ事務長、ジア副院長及び多くのスタッフの、地震被災者に対して何かしたいという強い希望によって起こりました。お金を救助機関に振り込む方法もありますが、あえて直接の物資輸送を選びました。十一日、事務長と数名のスタッフがテント・寝具・寝袋の買出しに行きました。店主の中には足もとをみて高い値段を提示した人もいたそうです。夕方からは藤田さんの指示のもと医薬品の荷作りを始めました。

輸送初日、幾つかの足りない物資を道中で買い込みながら、目的地に向かいました。アボダバードで建物が数件崩壊しているのが目にはいってきたと同時に、道の両端に救援物資を求めた人が立ち始めました。そこから三〇キロメートル先のマンセーラの被害がひどいということでしたが、主要道路沿いの建物に被害は見当たりませんでした。

被災者に物資を直接届けるという目的にしたがい車を進めることにしました。次の大きな町バタグラムを通り過ぎるときには二十時半を回り、道路沿いの建物しか見えないため、町の状況をきちんと把握できませんでしたが、三割ほどが崩れていたようです。

車をさらに走らせ続けたところ、民家が段々と減り、夜も深くなるのでバタグラムに戻りました。そこで事務長がこの地域に救援物資配給の準備をしている団体の代表と話しをしました。彼らは小さい車やロバを使って、山の奥に行くということでした。物資を確実に被災者に使用、譲渡する事を繰りかえし乞い、約束をし、物資を渡しました。その日はアボダバードまで戻り宿をとりました。

バラコート村――町の九割が崩壊

二日目は残っているお金を利用し、必要と思われる食料、医薬品などを手分けして購入、連日テレビでも放映されているバラコートに向かう準備を始めました。どれも値段は通常通りでしたが、包帯が見つかりませんでした。購入は昼過ぎまでかかり、それから出発すると目的地に着くのは状況把握の難しい夜になります。前日と同じ事を繰り返さないため、出発を翌朝にし、一人ひとりに渡しやすいように食料の袋詰めを一〇〇袋作りました。

三日目は二ヶ所に物資を持っていきました。最初にマンセーラのボリッチに行きました。そこはメインバザールから一山越えた三〇キロメートルほど離れたところにある村です。前日に会ったアボダバードの警察官の故郷で村一帯が崩落していると聞きました。村に着くと車の周りにたくさんの人が集まり、それぞれが被害の状況を説明しはじめました。実際には言われているほどの被害はなく、沢を上りながら一時間ほど歩いて一件の家屋崩落を確認しました。

崩落したボリッチの家屋

村は広く、全てを見て回る時間もないため、何人被災者がいるのかをリストにあげてもらうことにしました。リストの名前は二〇名ほどでしたが、約二〇〇名の村人の前で人数分だけをおいて行くことはできず、四五袋を渡しました。水は近くにあるので除きました。

次にバラコートに向かいました。町に近づくにつれ多数の車と土砂崩れによる道路封鎖によって渋滞していました。被害状況は悲惨で、町の建物の九割は崩壊していました。特にメインバザール近くの丘の家は全て潰れていました。瓦礫の下から人が出されるのを見る事はありませんでした。地震から一週間経って少し落ち着いたのか、それとも一週間ずっと救出作業がされてないのかは分かりませんでした。

町は人で溢れていました。特に、パキスタン国内から救援物資を持ってきている人が多く、予想以上に国際機関やNGOの人は少なく感じました。町には絶え間なく車が到着して、寄与者がトラックの上から物資を投げ、それを奪い合うのは被災者だけではない様子でした。道路に残されている衣類も大変目につきました。

バラコートには地域の救援本部が政府・軍によって設置され、ヘリコプターは次々に発着し、ラバを使って山岳地帯に物資を運んでいます。私達はそこに預けることにしました。

「何が必要か、誰に必要か」

緊急救援物資輸送は「何が必要か、誰に必要か」という点で非常に難しかったです。原因は主に三つあると思います。

一つ目は情報過剰と情報不足です。テレビで放映されているところは注目度が高く物資が集まりますが、正確な要求品目が伝えられていません。必要とされているテントが少なく、あまり必要とされていない衣類は捨てられています。また、水が必要な所、食料が必要な所、テントが必要な所、薬が必要な所、衣服が必要な所など場所によって要求する物が違います。運よく被害が知られている場所はまだ良いですが、日本と違って全国各地と連絡を取ることが難しく、山の多いパキスタンではまだ被害が誰にも知られてない場所で助けを求めている人がきっといるはずです。

二つ目は貧困です。被災地付近の道路にはたくさんの人がいました。特に、町から離れたところに住む人は裕福ではないので、無料で物資が手に入るとなれば一日中立っています。この二点を考えると、もし地震被害者だけに物資を届けるのが目的ならば、情報収集時独自のグループが要ります。輸送も一緒におこなうと、住民が多くの支援を受けるために被害を誇張して伝えたり、脅かしたりして必要以上に物資を求めるからです。

三つ目は救助活動に統制が取れていない事です。情報が交錯し状況を把握できず、物資が集まるがそれを必要とする人に届けることができていません。また、瓦礫を取り除くための充分な重機が一週間経っても現場にありませんでした。

今回のPMSの物資輸送も上記の理由と経験不足で満足な活動はできませんでした。被災者に直接手渡すという思いで出発しましたが、情報を自力で集めたり、山岳部に運んだりするには時間的・機動力的に足らず第三者に頼ることになりました。これ以上のことをするためには、人・時間・機械を用いた活動になり、冬に備えた援助、町の復興に関する援助など、中・長期的な活動がこれから求められると思います。

ボリッチで。下がPMSが配布した物資

地震被災者寄付金の使途について

中村先生から寄付金50万ルピー（100万円）の承認を受けた翌日、私達は地震被災者のための必要物資の購入を開始しました。2005年10月12日、PMSから車両３台と職員９名を動員し、最初の積荷には別記の品目を積んで、被災地に向けて出発しました。

私達は、車で行ける限り一番遠い被災地であるバタグラム（Batagram）に行きました。状況が納得の行くものではなかったので、途中で被災者に物資を配る事はしませんでした。その後、ハサナブダール（Hasanabdal）から私達と同行した別のボランティア組織に救援物資を譲渡しました。このグループは救援物資をトラック3台に搭載、配布係のボランティアが車両3台に分乗、略奪されないように防備もしていました。バタグラムには夜半に到着しました。翌朝、このグループのボランティアの人たちが救援物資を小分けして小型車両とロバとに乗せ、山岳地や渓谷地に運んで物資を配布しました。

まだ資金が残っていましたので、藤田看護部長に相談し、許可を得た上で重要な援助物資を購入することにし、食糧（リストは既に先生に送付しています）を運びました。

被災者に配布しやすいよう、食糧を小さな包みに袋詰めした後、ガルヒ・ハビブッラー（Garhi Habibullah）に向かい、最も被害が甚大な村落に行きました。被災地を実際この目で確かめるため、まずは救援物資を積んだ車両を置いて山を登りました。その結果、この地域で必要なのは食糧ではなくテントだということが分かりましたので、別の被害の深刻な地域であるマンセーラ（Manshera）地区、すなわちバラコート（Balakot）に行きました。バラコートとその周辺地域は壊滅していました。ここよりも被害の大きい地域で、今もまだ道路が通じていないところがあります。バラコートではあらゆる救援物資があふれており、軍の駐留地が設営され、そこから山岳地に向けてヘリコプターや軍のラバで食糧が運搬されていました。そこで私達は、医薬品以外の物資を彼らに渡しました。医薬品は、有り余っているので不要だと軍が受け取らなかったので、PMS病院で使用すべく持ち帰りました。ペシャワールに戻ったのは10月14日の深夜でした。

以上、ペシャワール会と中村先生への情報としてご報告します。

ＰＭＳ事務長　イクラムラ・カーン

品目リスト（アボタバード）

2005月10月14日

1	飲料水	1.5ﾘｯﾄﾙ x 12	25 ｶｰﾄﾝ
2	ナン		79 ﾊﾟｯｸ
3	ナン	ﾊｰﾌｻｲｽﾞ	34 ﾊﾟｯｸ
4	牛乳	1.5ﾘｯﾄﾙ x 8	5 ｶｰﾄﾝ
5	牛乳	1ﾘｯﾄﾙ x 12	4 ｶｰﾄﾝ
6	牛乳	0.5ﾘｯﾄﾙ x 12	10 ｶｰﾄﾝ
7	ビスケット	6ﾊﾟｯｸ x 24箱	11 ｶｰﾄﾝ
8	ナツメヤシの実	10kg	20 ｶｰﾄﾝ
9	紅茶	200mg	100 ﾊﾟｯｸ
10	砂糖	2kg	100 ﾊﾟｯｸ
11	マッチ	1000箱	2 ｶｰﾄﾝ
12	衣類		2 x 250 ﾔｰﾄﾞ
13	使い捨て注射器(5cc)	100個	16 ｶｰﾄﾝ
14	カルポル錠	100錠 x 40	2 ｶｰﾄﾝ
15	フラギル	400mg	12 箱
16	フラギル	200mg	4 箱

品目リスト（ペシャワール）

2005年10月12日

1	テント			11
2	防水シート			53
3	毛布・掛け布団・敷布団			100
4	寝袋			60
5	アスピリン	300mg	錠剤	13,000
6	カルポル	500mg	錠剤	2,000
7	エリスロマイシン	250mg	錠剤	2,500
8	エリスロマイシン	500mg	錠剤	2,000
9	フラギル	200mg	錠剤	1800
10	フラギル	400mg	錠剤	2800
11	O.T.C （ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ）	250mg	ｶﾌﾟｾﾙ	40,000
12	ピリトン	4mg	錠剤	10,000
13	ポンスタン	250mg	錠剤	24,000
14	ﾎﾞﾘﾌｧｯｸｽ皮膚用軟膏	20g	軟膏	90
15	サヴタル	1ﾘｯﾄﾙ	溶液	10
16	包帯	Mｻｲｽﾞ		2,280
17	使い捨て注射器	5ml		2400

＊ワーカー通信

飽くなき水路建設事業の現場で

灌漑用水路建設担当　本田潤一郎

垣間見た不満の源

今春、パキスタンビザを更新する為、カーブルへ行った。普段ならジャララバードにあるパキスタン領事館で更新しているのだが、現在一時閉鎖されていた。なぜかというと、アメリカの有名雑誌がコーランを侮辱したイラストを載せたのを知ったジャララバード市民や近郊の一部住民が激怒、暴動デモに発展、外国団体の事務所等に対し投石、放火、乱入がいたるところで相次いだ。その際、パキスタン領事館もこの暴動で被害を受けたからであり、対抗処置として領事館は数ヶ月たった今夏現在でも閉鎖されている（なお、我々の宿舎の隣の赤十字事務所には、暴徒が乱入し、事務所内の書類、パソコン、車まで燃やされたのに対し、我々の宿舎には一切被害は無かった）。

カーブルへ行くのは今年の冬に続いて二度目だが、真冬の凍えた一度目と違い、夏場の暑いジャララバードを一時でも抜け出して、涼しいカーブルへ行ける為、心は弾んでいた。市内に近づくと、ＩＳＡＦ（国際治安維持部隊）の車両が多数見回りをしていて、相変わらず物々しい山上の要塞都市といった感じだった。中心部に近づくにつれ、道路に並ぶメロンやブドウなどの果実を売っている露店に目を奪われていたのだが、市内を回っているうちに、中心部に並ぶ外国ＮＧＯの事務所や立派な宿舎と山際や郊外に密集するカーブル市民の家並みの対照ぶりに違和感を感じた。同行してくれたアフガン人事務職員に彼ら外国ＮＧＯが何の仕事をしているか尋ねたところ、日頃温厚な彼が不満混じりにこう答えた。

「彼らは、アフガニスタンに興味を持って旅行に来ているようなものだ。毎日高級車を乗り回しているだけで、まるで成果の上がらない、ニーズに合わない活動を二、三年やって、飽きた頃にすぐ帰っていく。このカーブルでさえ飲料水が充分に確保されていない実態に気付くＮＧＯはひとつも無いんだ。お金だけはばら撒いていくから、物価高騰で食料品を買うことすら日に日に厳しくなっている」。

確かに物価は我々が住むジャララバードでも、私がアフガニスタンに来てから約一年半の間にも随分上がっており、スタッフの多くが嘆いている。また彼の不満は、カルザイ中央政府の悩みと一致しており、最近、中央政府はその解決策として成果のないＮＧＯの大量削減計画を立て、活動報告書類の提出等を以前にまして要求してきている。ふとした会話から国際協力という名の偽善が国と国民の生活を苦しめている事を再確認した旅となった。

豪雨が糧（かて）に

今春よりジャララバード事務所より用水路事業に転属された。約二年間の苦労の末最初の本格的

建設中の水路で水浴びをする子どもたち

灌漑に成功した直後の為、毎日稲やとうもろこしの成長する姿や緑の戻った大地を見る事ができ、なにやらすごく得した感じのする日々を送っている。水路事業は、中村医師の直接指揮の下、現地人で進行責任者のヌール・ザマン氏が作業現場をアレンジし、測量をする者、水路の土台を埋め立てる者、水路内を仕上げる者、コンクリート構造物を作る者、植樹をする者、重機の修理をする者、物品や食事を用意する者、これらすべてのスタッフやレイバー達が一丸となって一つの水路を作っている。

その中で私の仕事は、水路事業に関する全般的な補佐・事務管理で、現地人責任者補佐、作業進行状況把握、重機のメンテナンス状況把握、スタッフ出勤管理、レイバー給料管理、水路事務経費管理、水路事務所管理、PMSガソリンスタンド管理、蛇籠工場管理、物品調達、情報伝達と、いろいろな事に関わっている為、日々飽きない。いろいろ管理して凄そうに見えるが、実情は水路事務所で共に現場補佐をしているパチャ・グルと失敗と迷走を繰り返しながら、何とかやりくりする日々である。

飽きないというと、今年は何十年に一回あるかないかの大洪水があり、水路のF～G地区下の広大な農地がクナール川に飲み込まれ、水路の真下が全て川となり、埋め立てした水路の土台を抉って決壊するという到底考えられない事が起こった（もちろん修復済）。また川沿いの幹線道路も、二車線あった道路が一車線通るのがやっとになる程崩落したりもした。最近も豪雨により、コンクリート作業地に二m近い高さの水が流れ込んだり、涸れ川が我々の想像を超え氾濫するなど、自然の驚異を見せ付けられている。だが、我々はむしろ何十年に一回の自然の驚異が今年起こった事で、想像を超える驚異にも対応できる修復が出来た。これからの作業地もどんなハプニングがあるか想像もつかないが、我々はこの大干ばつの大地に緑がよみがえる姿を思い浮かべながら作業を進めていく。

特殊ルールでラマザンに挑戦

ジャララバード事務所　松永貴明

ビスケット金庫!?

今年は十月の初旬にラマザン（断食月）が始まった。PMSジャララバードオフィスの勤務時間は七時から十五時で十二時から一時間の休憩だったのが、七時から十四時までで一時間の休憩なしのラマザンスペシャル勤務時間に変更された。

ラマザンの基本ルールは朝のアザーン（お祈りの時間を知らせるモスクからの呼びかけ）から夕方のアザーンまで（約十四時間）何も口にしてはいけないということ。水も飲んではダメ。タバコを吸ってはダメ。歯磨きもしてはダメ。

アフガン人スタッフはみなムスリマーン（イスラム教徒）であるから、もちろんこのルールに則って、ラマザンの一ヶ月間を過ごす。私もアフガン人スタッフに付き合ってやってみる。ただし、断食はオフィスの勤務時間（七時間）だけという特殊ルールを勝手に設けて。昨年のラマザンでは三日間ほどアフガン人と同じやり方で断食をやったが、はっきり言って続かなかった。かといって、スタッフみんなが断食している目の前で、何か食べ物を口にするのは憚られる。だから、今年はこのやり方で。

数日が経った。十二時あたりからお腹がグーグー鳴り始め、仕事に集中できなくなってくる。よくよくまわりのアフガン人スタッフを見てみると、みな空腹との闘いで仕事の能率が低下している。これはいかん。ラマザン中は空腹でみな仕事のペースが落ちる。ムスリマーンではない私がそれを補わなくては。と、無理やり自分を納得させ、その日の夕方、大量のビスケットをバザールで買い込んだ。

私が担当している会計セクションには二つの部屋がある。ひとつは通常業務を行うところで、毎日私と会計担当のアフガン人二名がここで働いている。もうひとつは通称〝金庫部屋〟。文字通り金庫のある部屋で、ここには基本的に私しか入れない。

ビスケットを大量購入した次の日の朝、私は金

庫部屋へビスケットを搬入。残りのラマザンの日々に備えた。毎日、お昼十二時頃になると、暇を見つけて、こそっと金庫部屋に潜入、四、五枚のビスケットを食べ、また仕事に戻るということを繰り返した。しかし、ラマザン後半になってくると、どういうわけか空腹に慣れてしまい、勤務時間は何も口にしなくても平気になってしまった。そのため、相当量のビスケットが金庫部屋に残ってしまったのだが。

スタッフハウスを「ハシゴ」

ラマザンは何も空腹との闘いばかりではない。晩飯が最高にうまいという特典がある。普段、日本人ワーカーは晩飯に日本食を食べるのだが、ラマザン期間中、私はほとんど日本食を食べず、アフガン料理ばかり食べていた。毎日、夕方のアザーンの時間になると、スタッフハウスの守衛室に行き、そこで食べていたからだ。日本人宿舎であるスタッフハウスはファーストとセカンドの二ヶ所ある。私はセカンドスタッフハウスの方に住んでいるのだが、今日はセカンドの守衛室で、明日はファーストの守衛室でという感じで、晩飯を渡り歩いた。

ここはアフガニスタン、客人歓待の国だ。一歩守衛室に入れば、守衛のおっちゃんたちから客人扱いである。これを食え、あれを食えと目の前にたくさん食べ物が置かれる。準備した晩飯を前に夕方のアザーンを待ち、アザーンが聞こえると、まずホルマと呼ばれるナツメヤシを干したものを食べてロジャ（断食）を破る。それから晩飯を食べ始める。

この守衛たちの晩飯はジャララバードオフィスのキッチンで用意する。だから、ファーストスタッフハウスに行こうがセカンドスタッフハウスに行こうが、メニューは変わらないはずである。しかし、私はファーストの方に好んで足を運んだ。

アフガン版チヂミに舌鼓

ファーストスタッフハウスにはママ・ジャンという守衛兼ハウスキーパーがいる。このママ・ジャン、水源確保事業の当初からこのスタッフハウスで働き、日本人ワーカーの信頼も厚い。いやいやそんなことよりここで重要なのは、彼の家がファーストスタッフハウスのすぐ裏手にあるということ。ラマザン中、ママ・ジャンはときどき裏手にある自分の家から奥さんの手料理を息子に持って来させるのである。ブラニィと呼ばれているもので、ナン生地でニラを刻んだものや薄く細長くきったジャガイモなどを包んで、それを油で揚げたもの。見た目は韓国のチヂミに似ている。おそらく塩と唐辛子とで味付けされていると思われるが、これがピリ辛でうまい。これを狙って、ファーストスタッフハウスの守衛室によく行ったのである。それどころか、ずうずうしくも「ママ・ジャン、明日来るから……」と前日に予約を取り付けたりもしていた。

イードで鋭気を養う

十月末になってくると、ラマザンはいつ終わるのだろうかとアフガン人スタッフが話し始める。このことは彼らにとってかなりの重要事項。ラマザン明けのイード（祝祭）があるからだ。これは日本の正月かお盆みたいなもので、期間は三日間ほど、この間仕事はお休みである。ＰＭＳはこれに一日加えて、四日間の休みにすることにした。しかし、肝心のラマザンがいつ明け、イードがいつ始まるのかわからないことには、休みの日程は組めない。アフガニスタンの休日・祝日はかなりアバウトで、「明日、独立記念日で休みだよ。」と休みの前日に知らされることもあるくらい。これでは埒が明かないと、そのとき『十一月二日から説』が有力であったので、十一月の二日から五日までの四日間をイード休みと決定。結局、イードは三日からだった。

イード休みの四日間鋭気を養い、イード後はラマザン中に微妙に呆けた雰囲気を一掃し、気合をいれる。これから水路現場は冬の陣。大攻勢が始まる。後方支援のジャララバードオフィスも忙しくなってくる。会計も水路現場レイバーの日当の百アフガニ札集めに奔走する。いつまでもラマザンの気分ではいられない。

▼事務局3階から6階へ移転しました▼

＊今春、事務局が移転しました。同ビル内の引っ越しですが、お便りされる際はご注意下さい。

現地主義を旨に マネージメントで奔走

ジャララバード事務所　芹沢誠治

管理する辛さ

八月に初めての休暇を日本で過ごして、ジャララバードへ戻った私を待っていたのは、井戸部門からオフィスセクションへの配置転換でした。井戸の仕事が一段落したこと、オフィスのジェネラル・マネジャーだった重住さんが、一身上の都合で辞めることになったので、新人の横山君と、会計のベテラン松永君と、井戸専任だった最年長の私と、三人でオフィスの仕事を任されることになった訳です。

ただ率直に言うと、若い頃から組織に閉じ込められて管理されるのが嫌で、この年まで自由気儘にやってきたのですが、ここに来て管理する側に回るハメになるとは想定外でした。物の管理、仕事の管理はきちんとやれる自信はありますが、素朴で、ストレートで、純粋に生きているアフガンの人々を管理する立場に着くのは、少々辛い思いがありました。ただ中村医師は、あくまで現地の生活者の支援を最優先と考えておられ、そのためには組織を犠牲にしてゼロからやり直しても良いという考えをお持ちなので、引き受けました。

前任者の重住さんから、オフィスと現場との軋轢など、運営の難しさを多少とも聞いていたので、最初に考えたことは、自分がどういうスタンスを取るべきかと言うことでした。

臨機応変の支援

ＰＭＳの仕事は、大きく分けると①医療事業②水路建設事業③井戸事業④実験農場の四つです。医療事業はペシャワール病院の管轄なので、オフィスに関わる仕事は、残りの三つ、いずれも土木・農作業という現場作業主体の仕事になります。私は、話を分かりやすく現場第一主義とし、「実際に仕事を行っているのは生き物の様な水と闘っている現場なのだから、オフィスの役割は現場への徹底したサポートだ」と決め、方法は、身近なＰＭＳ日本事務局の、スピードある臨機応変の支援、を手本とすることにしました。

具体的には、①カナル、ウェルズの各現場の機材・資材の購入とアレンジ②重機・車輌・燃料の手配③政府や他のＮＧＯの交渉、住民代表、業者との折衝④人事と会計。そして特に今年度は、⑤井戸事業の縮小を含めての予算削減⑥二月に引っ越しが予定されたニューオフィスの建設、等がオフィスの重要な仕事になりました。そして、日々のハードな仕事の中で、どうしたら、一〇七人の現地人スタッフと十余人の日本人ワーカーが、仲良く、楽しく、気分良くやっていくことができるか、それが私が自分に与えた課題でした。

倹約意識の差

この秋九月には、井戸事業の縮小と車輌経費の節約で、大幅な予算削減に成功し一安心したのですが、アフガンの人達は、ＰＭＳがあたかも「お金のなる木」を持っていて、言えば何でもタダでやってくれる、と思っている節があるのです。例えば、スタッフでさえ、お茶を飲むカップ一つ、不足すればすぐに買って貰えると思いこんでいて、予算という概念を持っていません。現在、新オフ

護岸の柳も着実に生長している

ィスを建設中ですが、セメント一つにしても、五年以上も勤務している幹部スタッフでさえ、予算を無視して、高い物を買って良い物を作りたがります。土地を政府から無償で借りているので、将来、建物は政府に引き渡すことになるのですが、その政府が、レンガは一番上等な物を使えと我が儘を言ってくるのです。

ＰＭＳは、他のＮＧＯのように日本政府の資金援助は受けておらず、日本の善意の人々からの寄付だけで運営しているのだから、お金は大切に使わねばならないと、先輩達が繰り返し説いてきたにも関わらず、この状況が続いています。いや、現地の人たちに悪気があるわけではないのです。むしろＰＭＳの仕事に大きな誇りを持ち、強いスティタスを感じていると言えます。例えば、先日ＰＭＳのＩＤカード（身分証明書）を発行したのですが、大の大人が子供みたいに、大喜び、大自慢で受け取るのです。まあ、それが彼ら現地の人たちの、ＰＭＳへの深い信頼と愛情の表現だ、と思うことにしました。

造成が進んだＤ地区の溜池

異文化に学びつつ、「改善」を模索中です

ＰＭＳ本院薬局　河本定子

「拭いてもいいですか？」

二ヶ月前予想外の湿度に驚いた残暑の日々が過ぎ去り、ペシャワールは日増しに朝晩寒くなり、ストーブを点けるようになりました。タウンマーケットの八百屋には冬野菜が並びはじめて、冬の到来が感じられます。

ＰＭＳ病院の薬局での仕事にもようやく慣れてきました。薬局は正面玄関に隣接した場所で、外のようすや天候を伺い知ることができ、患者さんと最も接するところです。薬局には、薬剤師のミスターＨと薬剤師アシスタントのミスターＲが働いています。私はその仲間として働くことになったのです。薬局ではそれぞれの患者さんに、受け渡しカウンターに置かれている小さなビニール袋に入れて、薬をお渡しするのですが、子供用のシロップ薬は、ガラス瓶に入っているので、手がすべったり、また子供が薬を持って床に落として割ってしまうことがしばしばあります。そんな時「新しい薬を出してほしい」と懇願されるのですが、薬を一枚の処方箋で再度渡すことはできないのです。

私は、ビンの割れる音が聞こえてくる度に胸が締め付けられる思いがします。どうにか解決策は無いかと考え「気をつけて、ボトルは落とすと割れます」というパシュトゥ語を日本人ワーカーの中山さんに教えて頂き、患者さんにその都度告げるようにしました。今後は、ビニール袋を変える予定です。

薬局で働くようになって、最初に部屋の中に入った時には、あまりの埃っぽさに、驚くと同時に薬の配置など日本との違いにこれからの仕事の大変さを感じてめまいがする思いをしました。真先にしなければならないことは、薬品棚の掃除や薬剤の整理整頓だと思ったのですが、現地語もまったく解らないことや現地での女性の態度を考慮し、今までのやり

やすいやり方を尊重した上、二人に仕事上の言葉を教えていただく気持ちを持って接していくことを心がけました。毎朝その日必要と予想される薬の量を棚からおろして薬局の受付机上に並べます。その机上も埃がザラザラしています。

ある日、とうとういたたまれなくなって勇気を出して雑巾を手にとり「拭いてもいいですか」と二人に尋ねると意外にもあっさり「OK、OK」と言う返事が返って来ました。拍子抜けしたのですが、気を取り直しその後は遠慮なく、部屋中を拭いて回りました。仕事場がきれいになるのは、二人にとっても気持ちがいいのか、私が雑巾を持って拭こうとすると、ミスターHが自ら雑巾を持って先に机上を拭きます。ミスターRも自分から雑巾で拭くようになりました。整理整頓も実施中です。

日本の尺度で測らず

さらに、仕事上の言葉を覚えるのには、たまたま薬剤師のミスターHが、多忙で薬局にいることが少なく、勢いミスターRが一人で患者さんの対応することが多く、私はミスターRの隣に立って錠剤のカウントをしながら覗きみては、薬の名前も覚えるようにしました。癖のある字が多くなかなか判読できない処方箋は、そこに書いてある字をペンで指して「ホワット?」と尋ねます。すると無表情で、読み上げてくれましたので、少しずつ薬剤名を覚えていきました。

困ったことには日によって患者さんが一時的に大勢集まることがあります。めまぐるしく忙しく、スピーディにかつ正確に薬をお渡ししなければいけません。ミスターR一人の場合は看護士さんが手伝ってくれて対応しています。又足りない薬品を別保管室へ受け取りに行ったり、突発的なことは、現地ワーカーの協力で助けられています。私は、必要最低限のパシュトゥ語を話して少しずつ患者さんに薬をお渡しできるようになってきました。

ゆっくりゆっくりですが、周りの皆さんに支えられて仕事をしてると感じています。日本とは文化風習も異なり女性の立場をふまえながら、日本の尺度で異国のことを測ることをしないで、清掃の件のように少しずつ改善を要するところはできるのですから、それを励みに仕事をしていこうと思っています。

そしてこのような機会を与えて下さった全ての皆様に、心から感謝致します。

▼2006年カレンダー▼
「大地に舞う」（画・甲斐大策）
――注文は同封のハガキで！
＊例年ご好評いただいておりますカレンダーが完成致しました。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。ふるってご注文下さい。
＊サイズはA2判、オールカラー、二ヶ月一枚、価格は1500円（税込。送料不要）です。同封のハガキで予約を受け付けております。
＊詳しくは同封チラシをご覧下さい。

【新連載】アリアナ大地の心1＊

絶対

甲斐大策

ヘーゲルが、ショーペンハウエルが、そしてニーチェはサルトルは……と、浅く青い談論を交わした学生時代から半世紀近く、頭の片隅に、近代西欧の哲学者達が「絶対」とは何なのかを探していたらしい、との想い出が、灰皿の汚れのように残っている。

ところで私達は、男女の口喧嘩程度のことにも「絶対」を口にしてはばからない。

「過去は絶対振り返らない！　あの人にはもう絶対会わないから……。」

しかしアフガニスタンは勿論、旧世界の大半を占めるイスラム世界、つまり十数億人の日常では「絶対」の語が意味をもたず、存在しないのに等しい。

三十数年前になる。カーブル空港の駐車場でパシュトゥン・ドライバー達と別れの抱擁を交わしていた。

「あんた、来年もまた来るか？」

「勿論、絶対戻ってくるよ、サド・フィ・サド（100パーセント）また来るとも！」

パシュトゥン達は微笑した。

「神の御心次第！（インシャ・アッラー）」

一瞬、私は虚空に泳がされた気分になった。冷たいじゃないか、再会、再訪の心を疑うのか、と思った。しかし彼等がひねくれているのでも冷めているのでもなく、彼等の心は私より熱く真直ぐなのは分かっていた。

彼等は、人間がどれ程さだまらない生き物か、現実世界がいかに移ろい易いかを識りつくしたバーレグ（大人）だった。たやすく感極まり情緒的にはしゃぎ過ぎる私達バチャ（餓鬼）に、現世の「絶対」、形而下の「絶対」はあり得ない、と示していた。凍てつく路傍でポプラの小枝を商う幼い姉妹も、読み書き学ぶ余裕なく茶店で働く少年も、「絶対」は、眼に見えない形而上世界にのみ、「信」と同義語として在る、と識っているのだった。

寒風吹き抜ける空港駐車場で、この世の「絶対」を口にする虚しさを教えてくれたドライバー達はその後、私の師となり兄弟となり、ある者は戦いに仆れある者は異郷の難民地区で逝き、ある者は今日もカーブルに生きる。

＊アフガニスタンの人々は誇りを込めて自らの土地を「アリアナ」と呼ぶ。広義にはパキスタンを含めアーリアン系の人々が住む土地。

取水口の改修完了、間一髪で決壊防ぐ

灌漑用水路建設担当　鬼木　稔

帰任後早々の使命

三連水門を作り終え、二週間ほどの一時帰国を果たして、再度次なる水門に取り組むべく、アフガンに戻ってきたが、待っていたのは意外にも「取水口の改修工事と恒久的にはチョキダール（守衛）小屋を作るように」との指示であった。クナール河より用水路に導水する重要な構造物であるが、相当の突貫工事だったのだろう、各部の寸法にバラつきが見え、周辺整備は全く手を付けられていない状態である。しかし用水路本体の両壁は蛇籠に守られ、水門は分厚いコンクリートで堅牢に出来ているので、本体そのものは基本的に問題はなく、外観上の手直し程度で済みそうだ。現場であらゆる方角からの実測と周辺の整備計画を練り上げ、イメージが出来上がったところで、かつて十ヶ月間一緒に汗を流した現地仲間の面々を探しに行く。

メーソン（石工、左官）の三名は自宅待機していたが、顔を合わせるのは、たった三週間振りだというのに、非常に懐かしい思いで再会を果たす。

早速連れ立って、各工区を廻っていくと、レイバー（現地作業員）のなつかしい顔とも再会出来て、そこの現場監督であるエンジニアの了解を得た上で、明日からの仕事開始に召集する。

並行して必要な資材の集積と、セメント、砂利、レンガ等の物資を発注する。

鍵を握る水量管理

酷暑の時期が巡って来た六月初旬、私の二作目の仕事が開始されたが、全員張り切っていて、皆の笑顔がほほえましい。取水口はニングラハル州とクナール州の州境に位置しており、ここより一〇〇メートルにつき七センチの勾配を保って流れ下るように設計されている。現在工事の最先端が一四キロメートル先の、ブディアライ村という所まで伸びているが、高低差が約一〇メートルあることになる。

水量の調達は、途中にも数カ所の水門を設けて、万全を期した設計となっているが、いかに永続的に用水路に水を供給し続けるかは、この取水口の管理が重要な鍵を握っている。したがって、この場所を管理・維持するためには、クナール河の日々増減する水位を常時観察し、流量を調整する専任のチョキダール（守衛）が必要であり、その為の恒久的な建物も造るのが、今回の任務であった。

工事の手順は三分割となり、一番工期のかかる周辺整備を手始めとして、次にチョキダール小屋を造る。取水口の改修は用水路の送水を一時的に止めなければ出来ないので、下流の農民が余り水を必要としない冬場に、第二期工事をすることに決める。その頃は次の水門工事の真っ最中でもあり、植樹もあって、三ヶ所の仕事が重複する多忙な冬となりそうだ。

周辺整備とは取水口の周辺を公園化すると同時に、地盤の補強や嵩上げを目的とする工事である。長さ約九〇メートルを、高さ一メートル石組みで嵩上げし、その上にレンガの欄干を張り巡らす。

レンガを積み上げ決壊寸前で取水口を救った

石はトルコの業者が、道路工事の拡幅工事の際に出た、余分（？）の石が、都合良いことに道路を挟んで隣接する場所にストック場として広範囲に山積みしてある。トルコの事務所で了解を得て、それを使わせて貰うことになった。早速七名編成の石補給隊を組み、一輪車でピストン輸送にあたる。

メーソンが石組みをし、残るレイバーが水汲み、砂ふるい、モルタル作りと、メーソンの補助を行う。灼熱の太陽のもと、オーブンに投げ込まれたような環境下での工事は辛いが、各人が役割にも慣れ、作業は円滑に運んでいる。

ある日、クナール河の赤茶色に濁った取水口の脇で、第二期工事（冬場）の手順を考えていたが、ふと思い当たったのは、取水口の水門が上下流に二基建造されていて、上流側の水門は現在の水位でも、あるいは工事可能かも知れない。冬場の掛け持ち工事が楽になる分だけ、片方だけでも出来れば終わらせておくことに越したことはない。

メーソンに相談すると、やってみようとの返事。即刻資材の手配をし、明後日から三名を振り分けての並行工事とする。ただ、偶然にもこの飛び入り工事が、近々幸運な結果をもたらすとは無論知る由もなかった。

間一髪で決壊防ぐ

斜めになった水門本体を直線に矯正し、凹角になっている上部も嵩上げして水平にする工事であるが、本体天井部分のコンクリート型枠を固定するのに、どうしても用水路の水中より足場とつっかい棒を何本も立てる必要がある。二人のレイバーが胸まで水に浸かりながらも、悪戦苦闘の末、どうやら作業を終えて笑顔で上って来た。思わず私は握手の手を差し出していた。「お疲れさまでした」。彼等の小刻みな震えが右手を通じて伝わってきた。

源流域をヒマラヤ、ヒンズークシュ山脈に発するクナール河の雪解け水は真夏でも冷たい。昨冬は降雪量が多く、その分夏期の雪解け水が、例年より増して、河の水位は日に日に上昇している。取水口より斜め堰が作られているが、その一二〇メートル先の先端部、ちょうど河の中央付近に私たちが「川中島」と呼んでいる円筒形の蛇籠があり、その中に青々と柳が繁っている。

増水は溜まる気配もなく、いつしか蛇籠は水中に没し、柳の根元も洗われ始めた。朝、現場に到着するや、先ず「川中島」の柳を見て、水位の上昇を観察するのが日課となった。次第に柳も激流に屈し、一本一本姿を消して最後まで残った柳も抵抗かなわず、河のモクズとなって全滅し、一抹の寂しさを隠せなかった。

泥染めにそのまま使えるような河面に、根っこがついた状態で、草木が濁流に押し流されてくる。中には羊や犬の死体もお腹をパンパンに膨らませて流れ下る、いや人間の死体さえも流れていった。一週間後、水没した畑の浅瀬に引っかかった米兵の死体が発見された。これは取水口の直ぐ上流で撃墜された米軍ヘリコプター二機の犠牲者一五名のうちの一人であった。

この間に取水口の工事は終わったが、なおも水位は上昇を続ける。水門の高さを五〇センチ高くしたのだが、何とその部分まで水が被っている。間一髪の工事で水は堰き止められたのだ。もし堰を越えて激流が用水路に流れ込んでいたら、下流域で決壊や農地の甚大な被害が出ていたかも知れない。偶然とはいえ、何と幸運だったのだろう。三四年ぶりの水害だったと後で聞いた。

二カ月半の工期を終えて、周辺整備と取水口の第一期工事は終了した。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

「主役は農家」をモットーに

農業計画担当　進藤陽一郎

失敗は豊作のもと？

「さてワリーさん今日の作業はどうしよう」。

僕達の農作業は、いつも現地スタッフや農家と一致した目標を持った上で始まります。それを象徴するモットーが「主役は農家」。現地の農家は決して無知などではなく、その土地の農業を知ることにおいては紛れもなく世界一。僕達は彼らの知識・経験を見習う様に接しつつ、いわば常に「主役」の主体性を全面に引き立てる役者です。

例えば、現地農家が僕達の試験栽培を凌ぐ立派な茶の苗を作りあげ、こちらの農法への批判たっぷりに自慢を見せる事がありました。僕は素直に「凄い！　これならダラエヌール一帯茶産地にする事も夢じゃないですね！」。実際、現地農家が独力で茶の栽培を成功に近づけるならば、こんな素晴らしい事はありません。

先日は中村医師自ら直接「主役」達に「井戸も用水路の建設も、全ては農業の為です」と激励をされました。また、日本から温かい指導をくださる高橋さんもいつも「主役」達への全面的な配慮を向けておられます。そうした追い風を受け、僕達はかみ合った働きを積み上げていると自負しています。

もちろん、何でも「主役」達の台本通りでうまくいく訳とは限りません。彼らの農法・生活スタイルは非常に保守的で画一的でもあり、慣れない作物に関しては自信満々で失敗をすることもあります。あるいは「いつも時間通りに終わることもないのに、なんで少し遅刻したぐらいでそんなに厳しいんだ！」など、彼らの仕事の観念と衝突することもあります。この様な失敗や摩擦は苦々しくはありますが、それもまた一緒に働くものとして共に学ぶ貴重な教訓材料であり、その意味では、いつでも僕らの仕事は成功と失敗、教訓の「豊作」です。

ほうじ茶を精製

さてここに、今年度は一層の成功の実りが多かった事を喜びを持ってお伝えします。昨年よりも若干の涼しい気候にも恵まれ、定植三年目に入った茶の剪定茎葉から薫り高いほうじ茶を精製。ダラエヌールの近隣住民とも共に記念すべき地元産のお茶を味わう事ができました。また、昨年に続き導入した日本米は収量において現地での記録的な数字となり、食味においてもその甘みを含んだ旨さが好評を博しております。そして年々種子・種芋への住民からの要望で持ちきりのアルファルファ・ソルゴー、サツマイモは、酷暑の栽培にも成功し、いよいよ採種技術や種芋貯蔵技術のテストを残すのみとなりました。これらには掛け値なしに、現地スタッフ・農家共々手を取り合って喜び合っております。周辺の住民も、普段はケチをつけたり冷やかしを残したりして去っていくものですが、同時に目に見えて優れた結果を出せば積極的に肯定してくれます。彼らは農民として保守的であると同時に、生活者として実に合理的でもあるからです。もちろん僕達は、決して功を急がず着実に努力を積み上げるのみ。焦りはしません。

ダラエヌールの農場で農作業に励む青年たち

根深い米軍への敵意

しかし、視野を少し広げてみると、この農村から見えるアフガン情勢でさえ、決して明るいものとは思えません。確かに子供達は毎朝学校に通い、村の商店に並ぶ物も豊富になりました。ところが実際、教育を受けた暁に農村を離れていくであろう子供達が支えるべき産業は皆無。突発的なNGO景気はこの国をどうしようとしているのか不可解です。

また、平穏に見える農村はいつも「ある瞬間」に殺気立ちます。それは米軍の装甲車が通りを走り去る時。「アフガニスタンは、休息に入っているだけ。わしらはこの傷癒えれば必ずアメリカを追い散らす」。畑の除草をしている農家が、過ぎ行く装甲車を見て苦々しげにそう口にする。「やめよう。僕は銃を持つ人達に協力なんかしないんだから……」そう言い返してはみますが……。空虚なNGO景気と、根強い反米意識とを思うとき、無力な不安を抱かずにはいられません。

幻の様な「復興」の末の見通し薄いアフガン。しかしPMSの事業は本当に大切なものから目を逸らしません。即ち、いのち、食べもの、そして一つ一つの生活の灯火。たとえそれが大河の一滴であっても、ここに縁あって出逢った人々との仕事は実体を持った力、そう思って今日も「主役」達と共に作業に向かいます。今この会報を手に取られている皆様も、どうかお変わりなくお過ごしください。所を問わず、いのちや生活が変わらずに平穏であること、きっとそれは有り難く尊いものです。今この会報を通じ、またペシャワール会を通じて縁が結ばれた皆様に、この尊い流れがお変わりなく共にありますように願っております。ここに感謝と願いを込めて。

スタッフハウス食糧事情

灌漑用水路建設担当　杉山大二郎

カレー粉が枯渇

水路関係で働く日本人ワーカが、アフガニスタンで一体どのような食事をしているのか、会員の方々は気になるのではないか。今回はそんな日常的な生活の一端を御紹介しよう。

このイスラム文化圏でも、特に宗教的戒律と道徳観が市井の人々に深く根づいているアフガンでは、食事事情が日本と較べて大きな隔たりがあると言えよう。

慣習的にはアルコール飲料や豚肉などが禁忌なのは言わずもがなで、物理的にも冷凍食品やハムなどの加工食品は手に入らず、ペシャワールからの定期便を待つ他ない。

福岡の事務局からも有り難いことに味噌や醤油、それに出し汁パックが送られてくる。夕食だけは日本人が作っていて、食料はバザールで売られている新鮮な野菜や果物、店先で絞めた鶏や牛肉の量り売りと種類も豊富で、常に買い置きしている。朝はスタッフハウスのチョキダール（男性のホームヘルパー）がナンとミルクチャイを用意してくれて、簡単に済ませる。昼食はそれぞれオフィスや水路現場で現地食が用意されており、日替わりの食事に舌鼓を打つ。されど現地食は油を大量に使う料理が多く、確かに美味いのだが、これが毎日だと食傷気味になる。それに高カロリーなので体重が気になる。

現地のインディカ米だとサッと茹ててチャーハンに向いているが、炊いて食べるにはどうにも具合が悪い。幸いペシャワールではジャポニカ米が入手できるので、我々の食卓の明るい未来は保障されている。しかし時には調味料が枯渇することもあり、下ごしらえを終えた後に気付くこともある（前もって調べろよなぁ）。

「よし、そろそろ具が煮立ってきたぞ、カレー粉を投入しよう」

「げ、ないっす！」

「なにぃ？」

そんな時は慌てず騒がず

「まあまあ待ちなさい。こいつを肉じゃがにすりゃいいんだ」。

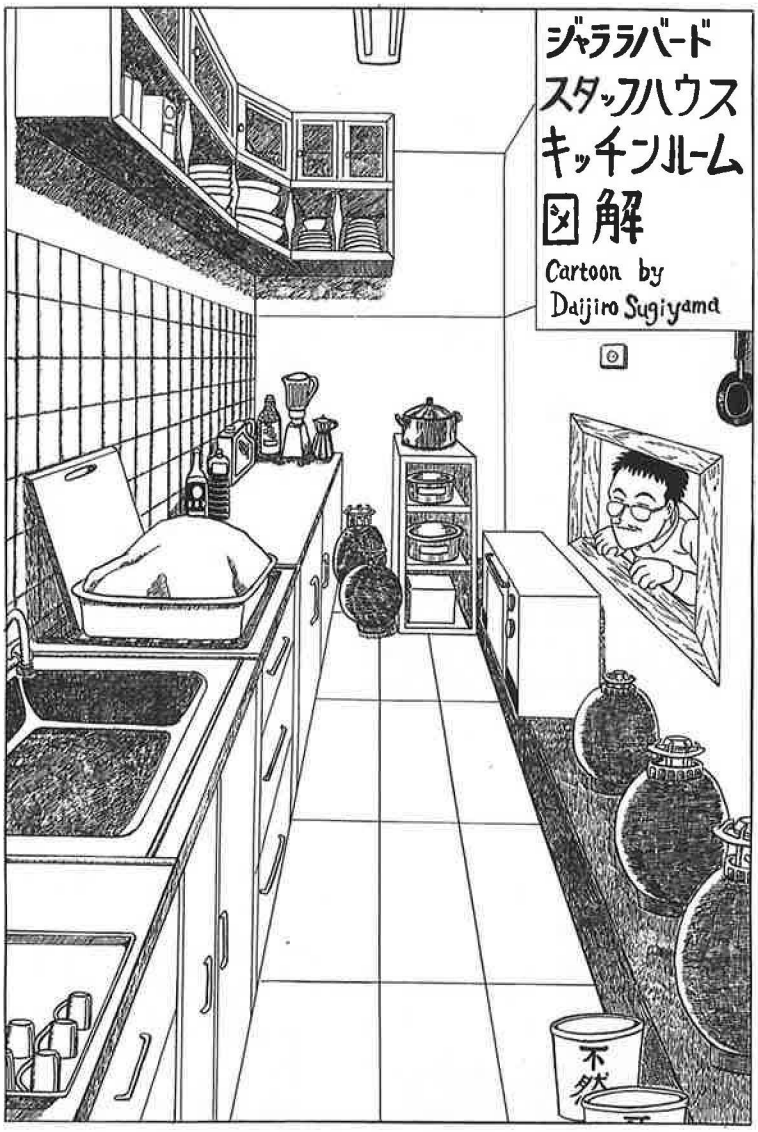
「おお、その手があったか。実はそんなことも

あろうと、今日は肉じゃがでも大丈夫なように用意したんっすよ。アハハハ」
と互いの知恵を誉め合い（ホントかね？）、我々はニコニコしながら肉じゃが作戦に切り換えた。

肉じゃがも叶わず……

しかしアッラーの神は無情である。あろうことか、醤油が少ないのだ。

「いつもあんなに醤油を使うからだろ」
「味付けはそっちの仕事でしょうが！」
早くも肉じゃが作戦は互いの罵り合いで頓挫してしまう。そこで昔、登山仲間から教わった料理法を思い出した。
「おい、ペプシを使おう」
「はあ？　今飲むんすかぁ？　それどころじゃないでしょう」



杉山ワーカーによって理想化して描かれたキッチン

「フフフ、実はそれどころなんだなぁ、これが」
訝る彼からペプシを受け取り、湯切りした後のナベにペプシをドボドボ投入する。
「あぁあー、ゲテモノでも作るんっすか？」
「まあまあ、騙されたと思いなさい。醤油の代用でカラメルを煮立てた、これぞ人呼んでペプシ煮と言ふ（今、名づけたけど）」
「おお、なんかいい匂いだねぇ」と他のワーカーが厨房に顔を出す。
「なに、ペプシを？　そりゃ奇抜だ、どうやって作るの？」
「嬉しいことを訊いてくれるねぇ。ささ、ペプシ飲みねぇ。煮立つまでリビングで作り方をお教え進ぜよう」
と厨房を後に、料理談議に花を咲かせていると、焦げ臭い臭いがリビングに漂い始めた。
「すわ、肉じゃがは？」と急いで駆け戻ると、アッラーの神も仰け反るしろもの、いや真っ黒に焦げた物質が鍋の中で煙を上げていた。
様子を見に来たチョキダールが一言。
「何だい、こりゃ？　日本の料理ってのは、何だか体に悪そうだね」
「……。あのぉ、バザールでケバブ（串焼き肉）を急いで買ってきてくれない？」
果たして、日本人ワーカーの罵詈雑言を受けて汚名返上すべく、店屋物で済ますのであった。

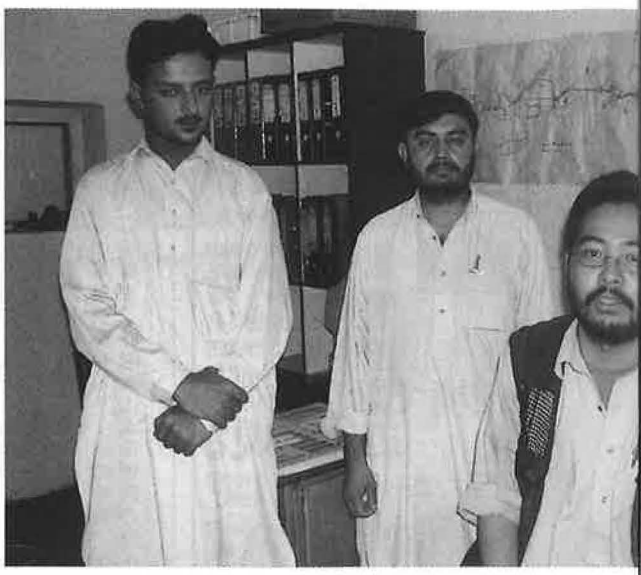
↑写真４　植樹班；神戸さん担当。柳の挿し木、水遣り、土手の造成、芝植え等、多岐に渡る作業があり水路が伸びれば伸びる程作業工程が長くなり神戸さん一人での見回りが大変。日本からＰＭＳの見学に訪れる医学生も植樹班に参加しています。

→写真５　農業担当、進藤さんとワリジャン。他にモハマドジャンと伊藤さんがいます。ワリジャンは前責任者橋本さんが水路作業やジャララバード事務所作業の為農業計画作業を留守にしなければならなかった時期、農業指導担当の高橋さんや橋本さんの指示のもとしっかり農業計画を守って来た人です。時々試験農場を訪ねると畑をピョンピョン飛び跳ねるようにして説明をしてくれます。

たのもしき PMSの 現地スタッフたち！(2)

PMS　院長代理・看護部長　藤田千代子

↑写真１　アフガニスタンのジャララバード事務所職員；緑の大地計画の農業、水路、井戸作業を全般的に補佐しています。左より、事務長重住さん、次期事務長芹沢さん、現地事務職員Ｍｒ．ザヒヌラ、横山さん、村井さん。この他にＭｒ．サブールという事務員がおりザヒヌラ共に有望な職員です。



↑写真２　ジャララバード事務所　会計担当；左からＭｒ．ジャベット、Ｍｒ．マナンと松永さん。一時期松永さんがあまりにも厳しすぎると職員からの声がありましたが、ペシャワールも同じで会計はその位厳しくなければ現地スタッフが安心して作業に取り組めないという現地スタッフからの意見もありました。その理由は会計に日本人が作業をする事で現地スタッフにとっては予算が公平に清潔に使われているという安心感があるのだそうです。

←写真３　水路作業地にあるアコモデーション（資材置き場兼宿泊施設）での昼食。手前から以前は学校の先生をしていたＭｒ・タラフダール、フィールドアシスタントＭｒ・モヘブラ、Ｍｒ・ナイーム、水路現場事務作業担当本田さん、Ｍｒ・サルフラーズ、Ｍｒ・ヤールモハマド、爆破班のＭｒ・ザルマイ。現在は爆破作業がないのでローラーを運転中。

●事務局便り

＊パキスタンで十月に起きた地震から一月以上が過ぎた。死者七万人以上、家屋を失った者三百万人以上と想像を絶する大災害である。しかも大半の被害者は、山岳部に住んでいる。道路は寸断され、被害の実態すら不明の地域もある。そもそも車の通行不能な峻険な山間に、半農半牧の人々は住んでいる。山の冬は厳しく、すでに雪が降り始めている。

今回の地震の被災地は、ペシャワールから三、四百キロ離れている。PMSでは、被害の大きさに衝撃を受けながら、可能な行動を模索した。日本側からもたくさんの問い合わせや協力依頼があった。しかし地震に関して私たちが出来たことは、車輌三台による被災地でのいくばくかの支援であった。

本誌に報告があるように情報も現場も混乱し、必要な物資を必要とする人々に渡すことが如何に困難であるかが推測できる。私たちが用意した医薬品も「有り余っていると、軍に拒否された」とイクラムラー事務長は報告している。パキスタン人で軍出身の事務長率いるチームですら、困難を強いられる現場で、外国人による短期の救援活動がどれだけの成果をあげられるか。

日本側事務局としては自らの力量を考え、今回の地震に関しての募金キャンペーンは行わないこととし、従来の活動継続に全力を傾注することを確認した。厳しい冬を前に、家を失った山岳部の人々がなんとしても平地に下り、冬を越して春を迎えることを祈らずにはおれない。そのためには、国家的な規模での支援が必要であり、国際社会はそれを最後まで支え続けねばならない。

ペ村から――――――――――♬

学校帰りに自転車を漕いでいるとふらっと立ち寄りたくなる、私にとって事務局はそんな場所です。風の冷たいこの時季は自転車乗りにとって少々辛いものがありますが、事務局の扉を開け、その熱気で寒さが吹き飛ぶ瞬間が大好きです。そして、現地に思いを馳せながら作業の手を動かす僅かな時間に、充実したものを感じます。事務局には様々な人が集まりますが、学生が少ないのがちょっと寂しいところ。お手伝いしたいけど躊躇しているという方は是非一度いらして下さい。大歓迎です。そして今、来年のカレンダーの注文を受付けています。ご自宅に、プレゼントに、いかがですか？ご注文お待ちしています！（サ）

中村哲医師の本

空爆と「復興」

―アフガン最前線報告―

9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集【2刷】1890円

辺境で診る 辺境から見る 【3刷】1890円

ダラエ・ヌールへの道 2100円【3刷】

医者 井戸を掘る 1890円【10刷】

医は国境を越えて 2100円【6刷】

ペシャワールにて 1890円【8刷】

聖愚者の物語 甲斐大策

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から 1260円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

ペシャワール会報「合本」1983～2004

B5判上製1300頁 10500円

注文は直接事務局へ

価格はすべて税込価格(税5%)です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号　TEL七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603

☎（092）731（2372）FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559

発行日　2005年12月7日　No.86　会長 後藤哲也　現地代表 中村哲　事務局長 村上優　名誉会長　高松勇雄